SOV／SVO 言語としての古英語

―― *Catholic Homilies* に見られる節中の 'nu' をめぐって* ――

加　藤　鉱　三

0．はじめに

生成文法家による古英語の分析は、Kememade（1987）やKoopman（1985）に代表されるように、基底語順として SOV 語順を仮定するのが普通である。それに対し、本稿では、少なくともÆlfric, *Catholic Homilies*（以下 CH）の古英語では受動分詞の分布に関する事実から SOV だけでなく SVO をも同時に基底語順として仮定する必要があることを１節において主張する。そしてそのような接近法では従属節 SVO 語順に対して二種類の派生を設定しなければならないが、しかしその二種類の派生は *nu* 'now' の分布を説明するためにはどのみち必要であるためこの接近法の弱点にはならず、むしろ独立の証拠となることを２節において主張する。

1．無指定仮説

1．1．主要部・補部媒介変数

動詞の INFL（AGR）への移動、または INFL（AGR）の動詞への移動を許す理論では定動詞の表面上の位置は基底での動詞の位置を必ずしも反映しない。というのは、動詞と INFL（AGR）の位置とその移動の組合せは(1)、(2)の三通りがあるが、同じ表面語順でもそれぞれ(a)、(b)のように違う基底語順が考えられるからである。

(1)　表面での SVO

a. $[_{I}\ V_i + AGR]\ (\ldots)\ [_{VP}\ t_i \ldots]$

b. $[_{I}\ V_i+AGR]\ (\ldots)\ [_{VP}\ldots t_i]$

c. $[_{VP}\ V+AGR_i\ldots]\ (\ldots)\ [_{I}\ t_i]$

(2) 表面での SOV

a. $[_{VP}\ldots t_i]\ (\ldots)\ [_{I}\ V_i+AGR]$

b. $[_{VP}\ t_i\ldots]\ (\ldots)\ [_{I}\ V_i+AGR]$

c. $[_{I}\ t_i]\ (\ldots)\ [_{VP}\ldots V+AGR_i]$

このようなことが起こるのは、定動詞の場合は定形になるために必ず INFL（AGR）と結びつかなければならないからである。だから、逆に言えば、INFL（AGR）と結びつく必要のない動詞形の表面での位置は基底での位置を直接反映することになる。

ところで、定形受動文には必ず *be* 動詞がありそれは必ず INFL（AGR）と結びつかねばならないため、本動詞である受動分詞は INFL（AGR）と結びつくことはないと考えられる。これが正しいとすれば、(1)、(2)のような定動詞の場合と違って、定形受動文での受動分詞の位置は、基底における動詞の位置を直接反映していることになる。それでは、CH ではどのような語順になっているのだろうか。[1]

(3) I. 24：7 of Noes eltstan suna, *se wæs* [gehaten Sem]
'from Noah's eldest son, who was called Shem'

(4) I. 2：14 to sumum mynstre *þe is* [Cernel gehaten]
'to a minster which is called Cernel'

(3)、(4)は同じ動詞を使った定形受動文であるが、(3)では受動分詞が補語に先行し、(4)ではその反対の語順になっている。もちろんどちらの語順も CH の中で全く普通に見られるものである。そこで上で述べた事とこの事実から、少なくとも CH の古英語では動詞句の基底語順として、従来言われているような（5a）だけでなく（5b）をも同様に認めなければならないものと思われる。

(5) a. [$_{VP}$ . . .V]
b. [$_{VP}$ V. . .]

しかし、(5a, b) の両方を同時に仮定するということは、どのように考えたらよいのだろうか。Chomsky (1986) のいう主要部・補部媒介変数 (head-complement parameter) は、主要部はその投射のどちらか一方の端に生成されるが、どちらになるかは言語ごとに決まっている、というものであると思われる。だから、一般に (5a) の値を取れば (5b) の可能性はなく、逆もまたそうであるのが普通であり、両方の語順が同時に可能であるということはないことになる。しかし今ここで、この媒介変数の第三の値として、値が無い、つまり無指定、というオプションが許されていると仮定してみよう。その仮定の下では、CH の古英語で (5a) と (5b) が同時に基底語順として可能であったのは、この言語はこの媒介変数の値が無指定であったからである、と考えればよいことになる。

では、CH の古英語では動詞だけが無指定であったのだろうか。もしそうであるとすれば、この無指定仮説は(3)、(4)の事実を説明するだけのアド・ホックなものであると言わざるを得ない。そこで、次にその他の範疇の語順を見てみることにする。よく知られているように、現代英語と違って古英語では形容詞が前置詞を介在させることなく直接に目的語を取ることができた。そのような用例を CH I. pp. 2-294の範囲で拾ってみると目的語が形容詞に先行する(6)のような例が18例あり、逆に形容詞が目的語に先行する(7)のような例が22例であった。尚、この数からは目的語が形容詞から遊離している場合と、目的語が人称代名詞である場合は省いてある。よく知られているように、古英語の人称代名詞語はそれを支配する要素に先行する傾向が強いからである。

(6) I. 10：24 þæt *he wolde* and eaðe *mihte* beon [his Scyppende gelic]
'that he would and easily might be equal to his Creator'

(7) I. 264：14 and *beoð* þonne [gelice englum]
'and is then like to angels'

また、名詞については、CH I. pp. 2～102において目的語（つまり目的格属格）が名詞に先行する(8)のような例は35例であり、逆に名詞が目的語に先行する(9)のような例は11例であった。この場合も上と同様の理由で人称代名詞（つまり所有代名詞）は数に入れていない。

(8) I. 32：8 for [middangeardes alysednysse]
'for the redemption of the world'

(9) I. 98：9 fram [ælcere brosnunge and gewemmednysse ures lichaman]
'from every corruption and pollution of our body'

調査範囲が狭いという事はあるが、これらの事実から少なくとも CH の古英語では名詞と形容詞は動詞と同じようにどちら側にも補部を取ることができたということは充分うかがえるものと思われる。この事は上での言い方に従えば、動詞と同じように、名詞・形容詞も主要部・補部媒介変数に関して無指定であったということになる。

それでは前置詞はどうであろうか。前置詞句内の語順に関しては Wende (1915)、Allen (1980) 等の研究があるが、それによれば、概略、目的語が名詞であるときにはほとんどの場合前置詞が目的語に先行するが、目的語が人称代名詞である場合には目的語が前置詞に先行してもまた前置詞が目的語に先行してもよかった。このように、前置詞句の場合には、目的語が先行するのは人称代名詞（と *þær* 'there'、*her* 'here'）に限られており、また人称代名詞は上で述べたようにそれを支配する要素に先行する傾向があるため、前置詞に対して主要部・補部媒介変数が無指定であったと考えるのは無理があるように思われる。また、本稿では Chomsky (1986) に従って CP・IP を仮定するが、CH の古英語に関して(10)のように CP・IP の主要部が左右両方に現われると考えなければならない理由はないように思われる。

(10) a. $[_{CP}$ C $[_{IP}$ NP $[_{I'}$ I $[_{VP}$. . .]]]]
b. $[_{CP}$ C $[_{IP}$ NP $[_{I'}$ $[_{VP}$. . .] I]]]

c. $[_{CP}\ [_{IP}\ NP\ [_{I'}\ I\ [_{VP}\ldots]]]\ C]$
d. $[_{CP}\ [_{IP}\ NP\ [_{I'}\ [_{VP}\ldots]\ I]]\ C]$

さて、上での観察が正しいとすれば、CH の古英語では動詞・形容詞・名詞は主要部・補部媒介変数が無指定であったが、前置詞・C（OMP）・I（NFL）は無指定では無かったということになる。ところで、後者の組は生産性がない機能範疇であり、それに対して前者の組は生産性があり、機能範疇の反対語という意味での語彙範疇である。そこで、CH の古英語では語彙範疇である動詞・形容詞・名詞は主要部・補部媒介変数が無指定であるが、機能範疇である前置詞・C・I は無指定ではないという自然類に分類できることになる。さて、(3)、(4)の事実から上でこの媒介変数が動詞に関して無指定であるという考え方を選べたが、いままで見てきたようにこれは動詞だけに言えることではなく、語彙範疇か否かという分類になるため、それはアド・ホックな考え方ではないということが本節の結論である。

1．2．古英語文の派生

本節では、上の無指定仮説の下では古英語文の派生はどのようになるのかを見ていきたい。よく知られているように、古英語の基本的な語順は主節で SVO、従属節で SOV または SVO である。この事実は、無指定仮説の下ではそれぞれ次のような派生になる。

(11) a. 主節 SVO $[_{CP}\ [_{IP}\ NP\ [_{I'}\ [_{I}\ V_i+AGR]\ [_{VP}\ldots t_i]]]]$ または
b. 主節 SVO $[_{CP}\ [_{IP}\ NP\ [_{I'}\ [_{I}\ V_i+AGR]\ [_{VP}\ t_i\ldots]]]]$
(12) 従属節 SOV $[_{CP}\ C\ [_{IP}\ NP\ [_{I'}\ [_{I}\ t_i]\ [_{VP}\ldots V+AGR_i]]]]$
(13) a. 従属節 SVO $[_{CP}\ C\ [_{IP}\ NP\ [_{I'}\ [_{I}\ V_i+AGR]\ [_{VP}\ldots t_i]]]]$ または
b. 従属節 SVO $[_{CP}\ C\ [_{IP}\ NP\ [_{I'}\ [_{I}\ V_i+AGR]\ [_{VP}\ t_i\ldots]]]]$ または
c. 従属節 SVO $[_{CP}\ C\ [_{IP}\ NP\ [_{I'}\ [_{I}\ t_i]\ [_{VP}\ V+AGR_i\ldots]]]]$

(12)と（13c）では従属節であるため補文化子（complementizer）が必ずあり、それによって動詞へ降下した AGR の痕跡が適正統率（properly govern）され

ると考える。この考え方は Travis (1984) がドイツ語の従属節の分析の際に提案しているものであるが、現代英語のように補文化子と AGR の間には *that*-定形、*for*-非定形というように呼応関係がみられる事からこの分析はそれほど不自然ではないと思われるので本稿でもそれを採用する。[2]同時にこの呼応関係があるところから、C と I の間にはなんらかの理由（例えば主語と AGR は呼応関係にあるので同一指標が与えられると考えられている）によって同じ指標が与えられるとここでは仮に仮定しておく。[3]もちろん主節では従属節と違って補文化子 C がないので AGR の動詞への降下は許されない。尚、c-統御（c-command)、統率、適正統率の定義は本稿では次のものを仮定する。

(14) c-統御（Chomsky (1981, p. 166))

α c-commands β if and only if

(i) α dose not contain β

(ii) Suppose that $\nu_i, \ldots, \nu_n$ is the maximal sequence such that

(a) $\nu_n = \alpha$, (b) $\nu_i = \alpha^i$, (c) ν_i immediately domimates ν_{i+1},

Then if δ dominates α, then either (I) δ dominates β, or (II) $\delta = \nu_i$ and ν_i dominates β

(15) 統率（ibid. p. 250)

Consider the structure (i)：

(i) $[\beta \ldots \nu \ldots \alpha \ldots \nu \ldots]$, where

(a) $\alpha = X^0$ or is coindexed with ν, (b) where ϕ is a maximal projection, if ϕ domimates ν, then ϕ domimates α, (c) α c-commands ν

In this case, α *governs* ν

(16) 適正統率（*ibid.* p. 273)

α *properly governs* β if and only if α governs, β and $\alpha \neq$ AGR

(15)の定義では(12),(13)で AGR の痕跡は最大範疇である IP の中にあるので C によって統率されないはずであるが、(15)の定義の時代には IP（＝S）は最大範疇と

は考えられておらず、Chomsky（1986）でも IP はそれ自身は内在的な障壁とはならないので、⒂の定義のままでも本稿の議論には差し支えないと考える。

さて、⑾—⒀の派生に戻る。（11a, b）は一見同一の表面語順に二種類の派生を認めているように見えるが実際にはそうでない。というのは、助動詞を含む文の基本的な語順は⒄—⒆であり[4]、（11a）の基底語順からは⒄が派生され、（11b）の基底語順からは⒅が派生される、というように、助動詞があれば本動詞の位置の違いがでてくるため表面語順は同じにならないからである。

⒄ a. Sbj Aux V. . .：主・従属節
　　b. NP $[_{I}\ V_i+AGR]\ [_{VP}\ t_i\ [_{VP}\ V. . .]]$
⒅ a. Sbj Aux . . . V：主・従属節
　　b. NP $[_{I}\ V_i+AGR]\ [_{VP}\ [_{VP}. . .\ V]\ t_i]$
⒆ a. Sbj . . . V Aux：従属節
　　b. C_i NP $[_{I}\ t_i]\ [_{VP}\ [_{VP}. . .\ V]\ V+AGR_i]$

また従属節（13a）と（13b, c）についても主節と同様の事が言える。しかし、（13b）と（13c）に関してはたとえ助動詞があっても同じ語順になってしまうはずである。もしそうだとすれば、本稿の無指定仮説による分析では一つの従属節 SVO 語順（ただし⒅の型ではなく⒄の型）に対して、（13b）と（13c）という二種類の派生を許すことになり、非常に大きな問題となる。またこのような問題が起きるのは、そもそも⑿と（13c）で AGR の動詞への降下を認めたことによるのであるが、一般に降下という移動は認められていない、という問題もある。このように、無指定仮説による分析は、（１．１節の事実を説明できるだけでなく）GB 理論による古英語の代表的な分析である Kemenade（1987）と Koopman（1985）では全く扱われていない助動詞を含む構文も⒄—⒆のように扱うことができる、という利点はあるのだが、しかし同時にそれは「二重の派生」と「降下」という大きな危険をも合わせ持つ分析であることがここで明らかになった。それでは、無指定仮説はそのような危険を冒してまでも主張しなければならないような接近法なのだろうか。あるいは、それ

らの問題は見かけだけのものであり、真の問題ではないということが言えるのだろうか。

2．節中に現われる *nu* の分布

本節では、CH の SVO 語順を持つ例の定動詞の周辺に現われる *nu* 'now'の位置を調べ、それが今提起された問題に対してどのような意味を持つかを見ていきたい。

CH の（節頭ではなく）節中に現われる *nu* の数は表 1 の通りである。ここでは *nu* の分布自体を述べるのではなく、前節で提起された問題を扱うのが目的であるため、それに直接関係する語順に現われるもの、即ち SVO 語順を持ち、主語が明示的にその節にあり、かつその主語は倒置されておらず、かつ *nu* が単独で現われているものに話を限定する。そのように限定するのは、以下で主語・定動詞・*nu* の 3 者間の相互語順を問題にしたいからである。また、*nu* はよく *todaeg* 'today' 等時の副詞・前置詞句を伴って現われるが、今回は煩雑さを避けるためにそれらを扱わない（が機会を改めて論ずるつもりである）。

	nu の位置：分類記号	例数合計	CH. vol. Ⅰ.	CH. vol. Ⅱ.
主　節 SVO	定動詞の直後　〔A〕	61	26	23
	主語の直後 ＝定動詞の直前　〔B〕	0	0	0
	そ　の　他　〔C〕	14	4	10
従属節 SVO	定動詞の直後　〔D〕	4	3	1
	主語の直後 ＝定動詞の直前　〔E〕	8	4	4
	そ　の　他　〔F〕	1	1	0

表　1

〔A〕型は⑳のように定動詞の直後に *nu* が現われている例である。

⑳　a.　Ⅰ. 114：33 Mine gebroðra, *ge habba*ð *nu* gehyred be ðan leasan wenan

'my brothers, ye have now heard concerning the false imagination'

b. Ⅱ. 308：138 *ac we willaþ nu* ure spræce her geendian;

'but we will now here end our speech'

〔B〕型の用例はない。〔C〕型の14例の内訳は、定動詞と *nu* の間に人称代名詞目的語だけが介在するのが９例、本動詞だけが介在するのが２例、両者が介在するのが２例、節尾の本動詞の直前にあるのが１例である。上で何度か触れてきた人称代名詞目的語の特異な性格からみて、人称代名詞だけが介在する９例は〔C〕型ではなく〔A〕型として分類すべきであろうと思われるが、ここでは厳密さを期するため仮に〔C〕型としておく。次に〔D〕型は本稿で重要な例であるので、４例全部を(21)に示す。これらの例では *nu* の位置が主節〔A〕型と同じであることに注目されたい。

(21) a. Ⅰ. 296：6 Se Hælend, *þe is* nu genumen of eowrum gesihþum to heofonum, . . .

'Jesus, who is now taken from your sight to heaven, . . . '

b. Ⅰ. 530.20 for þan þe *hi synd* nu sylfwilles fram godum weorcum gewriþene

'because they are now willfully bound from good works'

c. Ⅰ. 618：19 and *swa hwæt swa biþ* nu hefigtyme geþuht

'and whatsoever now appears to be trouble'

d. Ⅱ. 325：230 for þan þe *he is* nu orsorh ealra þæra frecednyssa þe us dæghwomlice costniaþ；

'for he is now secure from all the perils that tempt us daily'

(22)は〔E〕型の例であるが、これらも重要な例である。〔E〕型においては同じく従属節 SVO の語順である〔D〕型と *nu* の位置が違う点に注目されたい。

(22) a. Ⅰ. 12：19 þæt God gesceop to mæran engle þone *þe* nu *is* deofol
'that God created him as a great angel who is now the devil'

b. Ⅰ. 152：2 on þissum godspelle, þe *we* nu *gehyrdon* of ðæs diacones muðe þæt. . .
'in this gospel, which we now have heard from the deacon's mouth, that. . .'

c. Ⅱ. 70：106 þonne ða *ðleoda* *þe on hæðenscipe ær* lagon. nu *sind* mid geleafan to heora scyppende gebigede.
'when the nations, which before lay in heathenism, are now with belief turned to their Creator'

d. Ⅱ. 173.124 Fela oðre tacna. . . *þe* nu *sind* lange to reccenne；
'many other signs . . . , which are now long to relate'

次に〔F〕型の1例（Ⅰ.270：33）においては主語と nu は隣接しており、nu と定動詞の間に副詞句が入っているので〔F〕型として分類したが、その副詞句は動詞の下位範疇化に関与しない要素であるので、それも〔E〕型と考えるべきであるのかも知れない。

さて、上の事実をまとめると次のようになる。表1の上に示した条件にあう例のうち、主節 SVO では *nu* が定動詞の直後にくる〔A〕型か、あるいは人称代名詞目的語のみに介在される語順になるものが主流であり、*nu* が主語と定動詞にはさまれる〔B〕型は一例もない。それに対して、同じ条件の下で、従属節 SVO では *nu* が定動詞の直後にくる〔D〕型ばかりではなく、主語と定動詞にはさまれる〔E〕型も可能である。この〔E〕型は主節では許されないものであった。それではこの主節と従属節での *nu* の分布の違いはどのように説明すればいいのだろうか。

今仮に SVO 語順での *nu* の基本的な基底での位置を(23)のように仮定してみよう。

(23) NP $[_{I}$ AGR$]$ *nu* $[_{VP}\ldots]$

この仮定の下では、1節で述べた無指定仮説（(11)−(13)）では表1の〔A〕,〔B〕,〔D〕,〔E〕型の派生は(24)のようになる。(24c) が不適格であるのは、主節であるため補文化子がなく、それがないため AGR の痕跡が適正統率されないからである。

(24) a. 主節 SVO：〔A〕型
$[_{CP}\ [_{IP}$ NP $[_{I'}\ [_{I}\ V_i+AGR]$ *nu* $[_{VP}\ldots t_i]]]]]$ または
b. 主節 SVO：〔A〕型
$[_{CP}\ [_{IP}$ NP $[_{I'}\ [_{I}\ V_I+AGR]$ *nu* $[_{VP}\ t_i\ldots]]]]]$ または
c. 主節 SVO：〔B〕型
$*[_{CP}\ [_{IP}$ NP $[_{I'}\ [_{I}\ t_i]$ *nu* $[_{VP}V+AGR_i\ldots]]]]]$
d. 従属節 SVO：〔D〕型
$[_{CP}$ C $[_{IP}$ NP $[_{I'}\ [_{I}\ V_i+AGR]$ *nu* $[_{VP}\ldots t_i]]]]]$ または
e. 従属節 SVO：〔D〕型
$[_{CP}$ C $[_{IP}$ NP $[_{I'}\ [_{I}\ V_I+AGR]$ *nu* $[_{VP}\ t_i\ldots]]]]]$ または
f. 従属節 SVO：〔E〕型
$[_{CP}$ C $[_{IP}$ NP $[_{I'}\ [_{I}\ t_i]$ *nu* $[_{VP}V+AGR_i\ldots]]]]]$

(24)では実際に例文が見られる〔A〕,〔D〕,〔E〕型に対応するものは無指定仮説の下でも適格な派生であり、例文が見られない〔B〕型に対応する（24c）は不適格な派生である。このように、〔A〕,〔B〕,〔D〕,〔E〕型に対して1節の無指定仮説は完全に正しい予測をするのである。さて、何故このようなことになったかというと、それは無指定仮説では（24f）のように AGR の降下を許したためである。Kemenade（1987）ではそれを許していないためこのような予測はできない。また、Koopman（1985）ではそれを許しているが、しかし基底語順として SOV しか認めていないため、やはり（24f）の存在が予測されな

い。これは Koopman と Kemenade を含めて、SOV 基底しか認めない全ての分析に当てはまることである。このように、〔A〕,〔B〕,〔D〕,〔E〕型の全てに対して正しい予測をするためには、(25)の二つの提案、即ち1節の無指定仮説、を受け入れねばならないものと思われる。

(25) a.（CH の）古英語では、動詞句の基底語順として OV だけでなく VO をも同時に認める

b. AGR の動詞への降下を認める。

3．結論と今後の課題

1．1節において受動分詞の位置に関する議論から（25a）が提案されたが、それは動詞句だけでなく他の語彙範疇に対しても同様になされなければならないので、決してアド・ホックな提案ではないことを見た。1．2節で提起された問題は、ｉ）（13b）と（13c）は同じ表面語順を派生してしまうように見えることと、ii）AGR の降下を許さなければならない、というものであった。しかし、既に見てきたように、同じ表面語順を派生してしまうと思われた（13b）と（13c）も、*nu* があるときは（24e）と（24f）のように違う表面語順になり、それ故ｉ）は実際には問題ではないことが判った。さらにいえば、この二つの派生を許すからこそ従属節だけが何故〔D〕型と〔E〕型の両方を許すのが説明されたのであった。だから、ｉ）は実際には無指定仮説の問題であるどころかむしろ利点というべきものである。そしてその二つの派生が生まれたのは、「補文化子が AGR の痕跡を適正統率する」というように理論的に弱点を持ち、かつ一般に下への移動が認められていないのにも関わらず、それらの危険を冒してまで AGR の降下を認めたからであった。しかしそれを認めたのは、2節の *nu* に関する事実とは独立に、1．1節の事実を説明するためであった。そしてそれを認めたことによって、2節の *nu* に関する事実の説明が初めてできたのであった。だから2節で述べた事実は無指定仮説に対して独

立の証拠となり、それ故、いま述べたような理論的な危険を冒してまでAGRの降下を許す無指定仮説を認めるのは無産味ではない、というのが本稿で主張したい結論である。

しかし、本稿の分析には多くの問題が残されている。まず、背景となる理論的枠組みがやや古く、過去何年かの理論的発展の成果が取り入れられていないということがある。また、(CHの) 古英語以外に無指定仮説を必要とするような言語があるかということと、主要部・補部媒介変数以外に「無指定」というオプションを必要とする媒介変数があるのかを考えなければならない。[5]次に *nu* 以外の時の副詞 (*þa* 'then', *ær* 'before' 等) が果して *nu* と同様の振舞いをするかを調査しなければならないし、またもちろんCH以外の資料を幅広く調査する必要もある。最後に、〔C〕型のうち定動詞と *nu* の間に本動詞をはさんでいる語順を持つ4例は本稿の分析では厳密には反例になるものであるが、これらについては助動詞と本動詞の分析に関して詳しい調査・分析をした上で述べなければならない。また〔C〕型の残りの一例、既ち節尾の本動詞の直前に *nu* が現われている例では、本稿では触れなかった従属節SOV語順に現われる *nu* の二つの基本的な位置、既ち主語の直後と節尾のある動詞の直前、のうち後者の位置に *nu* が現われている。SOV語順に現われる *nu* についてもこの問題も含めていずれ機会を改めて論じるつもりである。

＊本稿の1節は近代英語協会第5回大会（昭和63年5月20日、於中部大学）で口頭発表した原稿に大幅に加筆・修正を施したものである。本稿をまとめるにあたって、天野政千代、児馬修、園田勝英、中野弘三、丹羽義信各先生に貴重な御助言をいただいたことにこの場をかりて感謝の意を表したい。

注

1．以下、本稿では例文の前に巻・頁・行を示し、主語と定動詞は斜字体で示すことにする。頁と行は、第1巻はThorpe編、第2巻はGodden編のものである。現代語訳は第1巻・第2巻ともThorpeのものをそのまま借用する。第1巻からの用例は筆者が調査したものであり、第2巻からの用例は *Microfiche Concordance* を利用した。

2．Koopman（1985）は古英語の分析においてこの事を仮定している。Koopman の場合は本稿と違って SOV 基底しか認めないので、派生は次のようになる。

i)主・従属節 SVO：NP $[_{I}\ V_i + AGR]\ [_{VP}\ldots t_i]$

ii)従属節 SVO：C . . . NP $[_{I}\ t_i]\ [_{VP}\ldots V + AGR_i]$

この分析では、後述の(17)が派生されず、また 2 節において論じられる *nu* の分布に関する説明はできない。しかし、AGR の動詞への降下を認める点においては、本稿の接近法は Koopman を発展させたものといえよう。

3．このように仮定してしまうと補文化子・主語・AGR の三者が同じ指標を持ってしまうため、(15)、(16)の定義の下では古英語では *that*- 痕跡効果がない（cf. Allen（1980））ことは正しく予測できるが、現代英語ではそれがあることは予測できなくなってしまう可能性がある。この問題はもちろん Koopman にも共通するものである。

4．(17)－(19)の型にあわない例文については加藤（1989）を参照されたい。そこでは次のような主張がなされている。CH の助動詞を含む文で、(17)－(19)の型にあわない例のほとんどにおいて、この三つの型にあわなくしている要素は全て本動詞に下位範疇化されない要素である。そこで、古英語の語順を考える際に SVO / SOV を区別する基準は、助動詞－本動詞の相互語順と、動詞に下位範疇化される要素のみを基準としてなされるべきである。ここでいう SVO とは 'O' にあたる部分が動詞の下位範疇化に関わる要素を含むか、または(i)の語順で助動詞を含む文のことをいい、同様に SOV も 'O' にあたる部分が動詞の下位範疇化に関わる要素を含むか、または(ii)の語順で助動詞を含む文のことをいう。(i)、(ii)で（. . .）の部分には下位範疇化に関わる要素を含まないものとする。ただし、よく知られているように古英語の人称代名詞目的語はそれを支配する動詞の前、更に左側に遊離する傾向が強い（cf. Kemenade（1987），Mitchell（1985））ため、SVO／SOV の基準からはそれははずして、下位範疇化されない要素と同列に扱っている。

(i)　(. . .) Sbj (. . .) Aux. . . V. . .

(ii)　(. . .) Sbj. . . V (. . .) Aux (. . .)

5．大門正幸、児馬修、園田勝英、山本圭子各氏の指摘による。

資　料

Godden, M (ed.) Ælfric's Catholic Homilies: The Second Series Text, EETS S. S. 5, London, 1979.

Thorpe, B (ed.) *The Homilies of the Anglo-Saxon Church*, Vol, Ⅰ and Ⅱ. The Alfric Society, London, 1876. (Johnson Reprint Corporation, New York, 1971.)

A Microfiche Concordance to Old English: The High-Frequency Words, compiled by Richard L. Venezky and Sharon Busler, The Pontifical Institute of Mediaeval Studies, Toronto, 1985.

参照文献

Allen, C.(1980) *Topics in Diachronic Syntax*, Garland, New York.

Chomsky, N.(1981) *Lectures on Government and Binding*, Fosis, Dordrecht.

Chomsky, N.(1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, Mass.

加藤鉱三（1989）「古英語語順の不自由性」，人文科学論集　第23号，pp. 149-58，信州大学人文学部.

Kemenade, A. van (1987) *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*, Foris, Dordrecht.

Koopman, W. F. (1985) 'Verb and particle combimation in Old and Middle English,' in R. Eaton et. al.(eds.) *Papers from the 4th International Conference on English Historical Linguistics*, John Benjamins, Amsterdam.

Mitchell, B. (1985) *Old English Syntax*, Clarendon, Oxford.

Travis, L. D. (1984) *Parameters and Effects of Word Order Variation*, unpublished PhD dissertation, MIT.

Wende, F. (1915)*Uber die nachgestellten Präpositionen in Angelsächsischen*, Palaestra LXX, Mayer & Müller, Berlin.